安心して帰りなさい　　マルコ 5:25～34

私たちはどんな時が一番安心していられるのでしょうか？　私たちがよく安心することの要素としてあげるもの、例えば経済力、地位や立場、健康、才能や能力、人間関係などは安心のある部分を満たしてくれますが完全ではありません。それらは状況次第ですぐに変わってしまうものです。またそんなことを求めるから平安が無いのだと達観していると今度は虚しさという平安を脅かす思いが起こってきます。今朝は、絶望的な人生の中にあった一人の女性が主イエス様から「安心して帰りなさい」と言ってもらって帰ることが出来たその様子をみことばから学びたいと思います。そこで鍵となるのはその女性の信仰です。彼女の信仰がどんな風に進んでゆくのか見てゆきます。

先ず第一は、神のことばを聞き、それに応答する信仰です。

マルコ 5:27 に「イエスのことを耳にした」とあるように、十二年間病気で苦しんでいた女性は「聞く」ことによって信仰を得ました。「イエスのこと」とはイエスについての様々な事柄ということです。それは主イエスが語られたこと、主イエスが実際なさった奇跡や癒しや、主イエスが教えられたことそういった様々なことを聞いたということです。そして大切なことはそれらのことを「神のことば」として聞いたということです。聖書に「信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。」（ローマ 10:17）とあるように、信仰は主イエスのことばを神のことばとして聞くことから来ます。現代はメディアやインターネットの発達によってキリスト教や聖書に関する資料や本も簡単に手に入り、調べることが出来ます。欧米の文学、絵画、音楽などの多くが聖書から題材をとっています。天地創造やノアの洪水、モーセと十戒、キリストの生涯とその受難などは、映画化されて、多くの人が聖書についてのなんらかの知識を持っています。今はインターネットによってすぐに調べることが出来ます。しかし、そういったものは「聖書について」知っているだけで、「聖書を」知っていることとは違います。どんなに聖書について詳しく知っていたとしても、それが人を救うのではありません。聖書が神のことばとして語られ、聞かれることがなければ人を救う信仰は生まれません。この女性はイエスのことを聞くに連れて、主イエス・キリストに対する信仰が芽生えたのです。神の真理がここにあると確信したのです。誰でも神のことばによってイエス・キリストを信じる信仰に導かれていきます。こうも言えます。神は神のことばに聞く信仰、神のことばを語る信仰を人に求めておられるのです。

第二に、神が、私たちに求めておられる信仰は、神の恵み、あわれみを信じて求める信仰です。
長年病気に苦しんでいたこの女性は、病気を直したいために、多くの医者にかかり、それで財産を使い果たしてしまいました。彼女は肉体の痛みだけでなく、経済的な苦しみをも背負わされました。それだけではありません。当時、この病気は、汚れたものとみなされ、神殿や町の会堂で神を礼拝することが許されず、一人前のユダヤ人として扱われなかったのです。神から罰を与えられた者とさえみなされていました。肉体の痛み、経済的な苦しみ、神に罰せられ、見捨てられているかもしれないという苦しみと悲しみ。彼女の置かれていた状況は「絶望」そのものでした。しかし、彼女は自分の置かれた状況を「運命」としてあきらめませんでした。彼女は宗教的、社会的には神から遠ざけられていました。聖なるものに近づくこと、触れることを許されていませんでした。しかし、イエスのことを聞いている中で、イエス・キリストは聖なるお方であり、奇跡を起こし、どんな重い病も癒すことのできるお方。そんなお方でありながら、どのような者にも目をかけ、憐れんでくださるお方であることを信じたのです。彼女はイエスの中に恵みの神を見出しました。神の恵みを信じ、かならずいやされると信じてイエスに近づいたのです。

私が苦しんでいるのは、神に見放されたからだと思うなら、まったく絶望しかありません。しかし、神は苦しむ者の救い主、悩む者の助けであると信じるなら、それは希望を与えます。苦しみは絶望を与えもすれば、信仰を与えもします。苦しみから絶望を選ぶか信仰を選ぶかはその人次第ですが、神は、私たちに信仰を選ぶよう呼びかけてくださっています。苦しみから救われたいために神に近づくのは、「苦しいときの神だのみ」のようで、良くないことだと考えている人もいますが、そうではありません。神は、「苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。」（詩篇 50:15）と言っておられます。神ご自身が「苦しいときは神だのみをすれば良いのだ。」と言っておられるのです。神の恵みを信じて求めましょう。求める者に主は答えてくださるのです。彼女はイエスの衣のすそに触れました。衣に触れるのが彼女に出来る精一杯のことであったのでしょう。この時、イエスは大勢の人や弟子たちに取り囲まれているのです。しかも、今日の箇所の前後に書かれていますが一人の生死を彷徨っている少女を助けるためにその家に向かっている最中です。一刻を争っています。恐らく皆、速足だったでしょうね。ですから彼女も必死だったのです。そしてお願い出来なくても衣にふれさえすれば癒してもらえると信じていたのです。

第三に、神の求めておられる信仰とは、イエスに向かいあう信仰、神との人格の関係の中に生きる信仰です。

病気の女性はイエスの着物にさわったとき、即座に痛みがとれ、病気が治ったことをからだで感じました（29 節）。そればかりでなく、イエスも、「自分のうちから力が外に出て行ったこと」を感じました（30 節）。それでイエスは「だれがわたしの着物にさわったのですか。」（30 節）と言って人々を見回しました。イエスは、全知全能のお方ですから、誰が自分の着物に触ったかを知っておられましたが、彼女のほうから名乗り出るのを待っておられたのです。なぜ、イエスはそうされたのでしょうか。「イエスの着物にでもさわれば…」というのが迷信的な信仰になりかねないからそれを正すためだったのでしょうか。そうではありません。イエスは彼女がしたことを立派な信仰として誉めておられます。あるいは、彼女がイエスの正面に来て、正式に「私の病気を治してください。」と頼まず、背後からイエスの力を盗み取るようなことをしたのを立腹したからでしょうか。そうではないと思います。イエスは、寛大であわれみ深いお方です。彼女にとって、痛みをこらえてイエスに追いつくのが精一杯でした。イエスの前にたちはだかって、会堂管理人ヤイロの娘のいやしのために急いでいるイエスの足を止めることはできないと、彼女は思ったので、後ろからイエスに触れたのでしょう。それなら、イエスがヤイロの娘をいやすのを見届けてから、自分のいやしを願えばよいではないかと言う人もいるかもしれませんが、イエスがふたたび、彼女のところに戻ってくるとは限りませんし、ヤイロの家に行けばかならずイエスに会えるという保証もなかったでしょう。つまり彼女はそのとき彼女にできた精一杯のことをしたのです。

イエスは、この精一杯の信仰を誉めてくださいました。しかし、同時に、彼女の信仰がもっと確かなものとなり、祝福されたものとなるために、イエスのうしろから近づいた彼女が「イエスの前に出る」ようになさいました（33 節）。十二年も病気を患っていた彼女にとって、病気のいやしはなによりも素晴らしい神からの贈り物でした。いやされたことを感じたその瞬間、踊りあがって、自分の家に帰ろうとしたかもしれません。人に知られることなく帰った方が本人も気が楽だと思います。しかし、主イエスのみこころは違っていました。つまり彼女がそのまま家に帰ったなら、いやしは得ても、癒して下さったお方、つまりいやし主と何の関わりもないままになってしまうことを、主は良くご存知だったのです。いやしは

素晴らしい賜物ですので、いやしを求めることだけに心が行ってしまって、いやし主に向かわないということもあることを私たちは知っています。イエスはこの女性にいやしを信じる信仰だけではなく、いやし主とまじわる信仰へと導こうとされたのです。癒し主と良い関係を持つというのはこのように考えたら良いと思います。癒された後、黙ってそっと家に帰れば彼女は恥をかくことなく、美味しいところだけを持って帰ることが出来ます。しかし、心のどこかに後ろめたいと言おうか罪悪感を抱えたままです。そしていつの日かまたイエスに出会った際、彼女は「その節は大変お世話になりまして」とは言えないのです。それどころか、遠くにイエスを見つけたら、逃げるような生き方、つまり孤独な人生を過ごすことになるのです。体は元気なのにいつも心に罪悪感を感じて、逃げ回り、隠れるような人生って、寂しく悲しい人生ですよね。主イエスは彼女にそんな人生を送って欲しくないのです。

彼女が、主イエスとの豊かな交わりを持つことは自動的には行きませんでした。彼女が主イエスの「誰がわたしの着物にさわったのですか？」の声に応答してイエスの前に出てゆくのですが、そこには「女は恐れおののき」と書かれています。怖かったのです。主イエスに何を言われるかという恐れでしょうか。あるいは群衆の冷たい視線にさらされるという怖さでしょうか。その根底にはこの女性の強い人間不信というものがあるのではないでしょうか？彼女はその病気ゆえに汚れた者、近寄ってはならない者、持っている家族、友人といった人間関係の中ではやっかいな者とされて生きてきたのです。主イエスが「娘よ」と言われているようにまだ若い女性です。しかも、思い切って医者に診てもらって、治療してもらっても一向に良くならずに、お金だけはやたらかかってしまい自分の手元には何も残っていなかったのです。人に裏切られ、無視され、存在まで否定されたのです。強い人間不信に陥ってしまっていたと思います。だから、人に見られながら主イエスの前に出るのが非常に怖かったのです。しかし、彼女は主イエスの前に思い切って出て、すべての真実をありのままに語りました。その結果、主イエスから返ってきたことばは 34 節です。「娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです。安心して帰りなさい。病気にかからず、すこやかでいなさい。」これからの人生、何も心配しなくても大丈夫。安心して家に帰りなさい。と言われたのです。この時、彼女は肉体のいやしだけではなく、たましいのいやし、「安心、平安」を与えられました。ほんとうの平安は、神との正しい関係に導かれ、完全に神に受け入れられているということ、つまり「神との平和」から来ます。神の与えてくださる平安とは神との平和、神との親しい関係です。彼女には病気のいやしだけでなく、この神との人格と人格の関係が必要でした。いやしの真の目的は、私たちをいやしそのものにではなく、いやし主なるお方に導くことにあります。いやしを信じるだけではなく、いやし主に信頼することが何よりも大切なのです。

この女性に向けられている主イエスのまなざしは私たちにも注がれています。私たちは主イエスのことばを神のことばとして聞く、信仰に生きているでしょうか？　神の恵み、真実を信じ、熱心に求めているでしょうか？　そしてイエスに向かいあう信仰、神との人格の関係の中に生きる信仰によって生きているのでしょうか？　祈ります。